

ロックンロールの地理学

久保幸夫

この随想を書く時期は、年度末というまことに都合が悪い時期である。ともかく、研究をまとめ、成績をつけ、ため込んでいる原稿を始末するのに四苦八苦という季節なのだ。まあ、引き受けた原稿をため込んでいるのは、この時期だけではないが。したがって、催促がないものは後回しになってしまう。というわけで、書くと約束して、数年間もそのままになっている原稿も少なくない。

その一つに、ロックの地理学がある。ロックとはもちろん、音楽のロックンロールのことだ。ぼくは、ロックを聴いて育った世代なのだが、擦り込みというのは恐ろしいもので、仕事をしているときなど、ふとボブ・ディラン、ビーチボーイズあたりを（古い！）口ずさんでいたりする。少なくとも、ぼく精神形成にはロックは多大な影響を与えたようだ。

「アシュベリーパークからの挨拶」は、ブリス・スプリングスティンの最初のLPのタイトルである。この怒り狂ってシャウトし回っているロックを聴いたとき、ニュージャージーのアシュベリーパークに行ってみたくなった。スコット・フィッツジェラルドの時代、つまり1930年代には、ニューヨークの金持ちの別荘地であり、その後コニーアイランドと並ぶニューヨーク庶民の夏の遊び場だった、ということくらいは小説から知っていたが、あのスプリングスティンの下層労働者の叫びとはどうもつながらなかった。

アシュベリーパークに行ったのは、数年前の夏の午後だった。プリンストン大学で地理学者のウォルポートと会うつもりだったのだが、どうしてもつかまらない。そこで空いた時間で、という

わけだ。ま新しい高速道路を東に走ると、バックマーシュの手前で道が途切れた。そこを越えると、住宅地が砂丘の上に広がっていた。ただ広い道を下って行くと、突然視界が開け海岸に出た。ともかく奇妙な景色だった。川崎の工場地帯に突然、江ノ島がある、みたいなのだ。かつては高級だったろう巨大なリゾートホテル、アメリカ国旗をやたら建てている貸し別荘（昔は金持ちの物だったろう）、ゴーストタウンを思わせる大きなジェットコースター、こういったものが煙でくすんでいる工場街の中にあるのだ。戦時中、軍需工場ができて以来、ニュージャージーのこのあたりは工業都市になっていたのだ。この街には、やりきれなさが満ち溢れていた。

イー・フー・チュアンなどによる景観解釈が流行したこともあったが（この手の研究はもう下火になったが）、ロックにだって、そういうのがあっていいのではないだろうか。例えば、ボブ・ディランの音楽だって彼がミネソタのダルス出身のユダヤ人ということ抜きにして考えられない。アメリカでもっとも家出が多いミネソタ。ニューヨークの街娼の主産地でもある。ジム・クローチ（もう、知らないだろうなあ）だったら、フィラデルフィア近郊のイタリア系ということ抜きにして「ニューヨークは嫌いだ」の曲はでてこない。

昔、サルトルは現象学について、「きみはこのコーヒーについてだって哲学を語れるんだよ」と言われた。地理学は、果たしてロックについて語ることはできるだろうか。